# 第三場面　七組のまとめ

「僕」は、ちょうの量が多いだけで、ボール紙の箱に入っているからとバカにされるため、妹にしか見せないつもりでいたが、コムラサキを発見し、隣の子供に見せたら、「珍しい」の一言で、こっぴどく傷つけられた。

髙橋尚暉

「僕」は、古いつぶれたボール紙の中に入れてあるちょうを見せるのが恥ずかしかったから、妹にだけ見せていた。しかし、とても珍しいコムラサキを捕らえると、隣の子供にだけは自慢してやろうと考え、コムラサキを見せた。だが、隣の子供は、初めは珍しいと認めてくれたが、すぐにたくさんの欠陥を発見し、「僕」の喜びはあっけなく傷つけられた。

堀　智貴

ボール紙の箱という幼稚な設備だった「僕」は、仲間に外見だけで判断されるため、妹だけにしか自慢しなくなった。しかし、隣の子は中身で判断してくれると期待できるので、コムラサキを捕まえ、見せに行った。だが、結局認めてはもらえず、「僕」の心はずたずたに傷つけられた。

竹中麻雄

「僕」の収集は、みんなのようなぜいたくなものではなく、ボール紙を使うような、とても人には見せられないものだった。だから、「僕」は自分の妹たちだけに見せるようになった。しかし、あるとき、僕らのところでは珍しいコムラサキを捕らえた。それを、信頼はしているが見返してやりたいとも思う隣の子供に見せた。彼は模範少年で、初めはその価値を認めたが、こっぴどい批評家のため、「僕」の獲物に対する喜びは、傷つけられた。

満仲安紀

「僕」の収集は、ボール紙などによる幼稚な設備であるため、貴重な獲物があっても妹たちだけにしか見せられなかった。しかし、珍しいコムラサキを展翅したとき、自慢したい感情がわき上がってきた。そして、自分の幼稚な設備ではなく、ちょうだけを見てくれると思われる隣の子供に見せた。しかし、ちょうだけを見てくれはしたものの、展翅のしかたなど、もっともらしい欠点を発見されたため、「僕」はプライドをかなり傷つけられ、もう二度と彼に獲物を見せなかった。

大久保咲良

「僕」はちょう集めを両親に反対され、しかも家が貧乏でボール紙を使ってちょうの収集を行っていた。しかし、周りは本格的な道具ばかり持っていて、自分は恥ずかしくて妹にしか自慢できなかった。ある日、コムラサキという珍しい蝶を見つけ、隣の子供に自慢したが、難癖をつけられ、傷つけられた。

三谷楓真

「僕」は、いつもならボール紙の箱が恥ずかしくて、妹にしか見せないのだが、あまりにも珍しいコムラサキを捕まえたので、自慢するには妹じゃもの足りず、隣の子供に見せてみたものの、あっけなく傷つけられてしまった。

鈴木大輝

「僕」は、みんなと違い、立派な道具を与えられず、ボール紙の箱の中でちょうを保管していた。だが、「僕」はそれをみんなに見せるのが嫌だった。みんなよりたくさんの量を捕まえていたのに、自慢できなかったため、妹たちだけに見せることにしていた。だが、ある日、珍しい青コムラサキを捕まえた。妹に見せるだけでは高ぶる感情を抑えきれず、隣の子供に見せた。すると彼は、最初はほめていたものの、あとの方には「欠陥」があると言ってきた。「僕」は、コムラサキを捕まえられただけでもとてもうれしかったのに、そんな批評をされて、とても心を傷つけられた。

岩田美咲

「僕」は、収集しているちょうをボール紙の箱に入れていた。それはあまりにも幼稚で、友達には見せることができず、いつも妹たちだけに見せていたのだが、ある日、珍しいコムラサキを捕らえることができた。「僕」はそれを隣の子供に見せ、自慢し、見返してやりたくなった。だが、彼から帰ってきた言葉は期待に反して難癖ばかりで、「僕」はとても傷つけられた。

柴田珠里

「僕」の宝物は、みすぼらしいボール箱にしまっておかなければならなかった。それが他の者に指摘されるのが恥ずかしかったため、ちょうは自分の妹たちだけに見せていた。ある日、「僕」は捕らえた珍しいコムラサキを隣の子供に見せた。彼は人として信頼でき、かつ、見返したかったからだ。しかしその結果、「僕」の喜びはすっかり傷つけられてしまった。

内木希美